説容『万年青』を読む

宮尾 正樹

文化大革命時期の文学は、文革以降の文学研究においてはほぼ全面的に否定されるか、いっそ無視されてきたが、

最近新たな見直しが始まりつつある印象を受ける。

一つは既成文壇が壊滅状況にあった中で、紅衛兵世代を中心に生まれた文学の発掘である。

近年、『文化大革命時期の地下文学』題した本が現れた。恐らく当時、紅衛兵として、あるいは下放青年としての体験を共有した者のみが多かったが、

それらの作品を読むことによってどのような「文学」が私たちの前に繰り広げられるかは今後の課題である。この

うが、一つの可能性として、七〇年代末の『北京の春』の時期に、雑誌『今天』に転載された文革時期的作品についても言えるかもしれない。
お茶の水女子大学文学会報
第十三号

宜ら出版社社長の目を通し、出版計画に組み入れられる。
稿集部の要求に応じて修正し、出版を待ったが、「批評批
孔」キャンペーンが始められ、厳文井、王致遠、高志宜が再び批判の対象となり、罪状の一つに『七人の命を奪った国
民党裁判官の娘』の作品を出版しようとすることが挙げられ、出版は頓挫する。
講客は出版社の指導者を選ばず、それなりの審査を施し、出版される。
『万年青』出版に関しては、さらに後日談がある。「四人組」逮捕後、今度は江青に宛てて書いた手紙が問題とな
り、講客が発表される。結果は問題ないとされるものの、それまでずっと享受していた創作休暇を取り消され、七七年四
月には资金もストップされる。さらに、『万年青』の主人公が江春旺で、生産隊長が江万全という名前になるが、江
青を賛美し、鄭小平を攻撃するものだとのことでたらめられた講客が出版され、『万年青』は再び出版される。
計画に組み入れられる。再び修正を施した上、「一九七五年九月」ようやく出版される。

この経緯を見ても、講客が一般的に作家が発売に抱くであろう以上の場合、あるいは執着を抱いていたことがわ
かる。政策が一歩度読み替換っても、書いた当時の自分、その努力の結晶としての作品を簡単に否定できるわけではない。その
作品に対して、政治的観点の著者で作品の価値を質える。しかも後知恵的な批判が行われることに、作者は反発する。

例えば、龍化龍「為人生唱賛イの愛」、「漫談譜客の小説創作」は、「永遠は春天」以降の講客の作品に対して高い評
価を下しながら、文革中的作品に関しては、誤った政治思想の影響により、公式的、概念的な作品にしかなかった理由で、人民の真実の感情や要求が描かれていなかったと断するが、こうした類の批評に作者はこう答える。

「私たちは生活は政治とは不可分のもので、文学作品が生活を反映しなかったということをほうから離れてのものではありません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。しかし、広範な生活も動員されて反対されたのです。私たちは見方には同意できます。しかし、広範な生活も動員されて反対され、生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生活の中で、確かに生活は政治の役に立っている。我々はその見方には同意できません。生
『万年青』は、中国北方の農村を舞台に、一九六二年九月に繰り広げられた農民たちの生産請負制反対の運動を描いた作品である。一九五八年の大躍進の失敗、それに続く「自然災害」という困難な状況下で、急激な農業集団化に歯止めがかかり、各地で生産請負制（包産制）が導入され、二二年一月からニ月にかけて開かれた党中央工作会議において、毛沢東が大躍進の失敗の責任について自己批判した。だが、九月には党第八期〇中全会で、継続改革を希望する者だけでなく先に生産請負を停止するように決める。貧農たちの反対の意志を震わず、動作をとりきることにし、黄光は各層の農民を訪れ、役柄を説き、春旺はその誤りを平立てる。大会は請負制を採択できないまま終わる。黄は党支部大会を開催し、請負制の代わりに、改革の必要を訴えて、春旺は江玉林を問い詰める。
め、玉杯は遠方に見定めて自己保身を図るが、裏切られたと知った鶴連れ玉杯の陰謀を暴露する。折しも、共産党八期一〇全会が開かれ、集団化の方針が確認され、政治情勢を見るに歴然たる光景は自己批判し、万年青の農民たちは再び社会主義の大道を歩み始める。

なかなか面白い作品で、五〇〇章以上に及ぶ長編小説に様々なプロットを盛り込み、それを最終的に諸負制反対の運動に収束させる手腕は見事なものである。それ以前に書いた三つの中話作品の中の成功した人物やエピソードをぎ込み、作者の「当時の全ての生活の感受」を動員して書いたものだと言うだけのことである。不適当なことの数々から来るのか、作品の舞台は三年間の「自然災害」を乗り越えた後の農村である。万年青では、この期間一人の死者も出さなかったことになるが、集団化の正当性の大きな根拠となる。しかし現実の災害は全国で一千人と七百と九千と言われる死者が出し、作品の執筆、発表当時は公式に認められていなかった上的事実が明るいを見出せない。しかし、執筆時ににおける現実、作者自現実を正しく反映していないところにちなんだ、作品自体が現実の反映度、すなわち、執筆時ににおける現実、作者自身に表面化を従わなが、実際にには「腹をこまかさず、作物をこまかさず、社員をこまかさない」こと、すなわち、
「欺上不欺下」である。作品が読者を引きつけて続けるのは、『欺上不欺下』が時を陰謀する様な智略によって見せていくのを、匿名の密告、調査に赴いた県幹部の日記、会議の議事録等さまざまな文体で語られる物語の中に見せられるからである。この作品はもはや現実の側からの保証を必要としていない。もちろん、文革期のように、作化の初期において、集団化のベースを絶める調整政策が行われたが、この時には方青の人々は『欺上不欺下』に既に満足している。また、方青に先立って生産請負制を導入させられた農民どうれでも、『欺上不欺下』はそれを退け、真正面から、何の効果もなく反対するのである。その作品におけるタテラとしての、この智略は自己のものだったに違いない。だが『万年青』を書いた七三年当時では、それを全編を貫く柱とするべきはできなかった。方青村でも、主人公の鄭大牛が『明包暗不包』を提案するのだが、主人公春旺はそれを退け、真正面から、何の効果もなく反対するのである。その作品におけるタテラとしての、この智略は自己のものだったに違いない。だが『万年青』を書いた七三年当時では、それを全編を貫く柱とするべきはできなかった。方青村でも、主人公の鄭大牛が『明包暗不包』を提案するのだが、主人公春旺はそれを退け、真正面から、何の効果もなく反対するのである。その作品におけるタテラとしての、この智略は自己のものだったに違いない。
三

南雲智氏は、江春旺的人物像が大罪の幹部像を現していくと指摘している。物語の登場人物としての魅力に欠けた作品の描写であるが、原作の、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べており、事実に記録されている人物についての描写について述べている。
お茶の水女子大学中国文学会報 第十三号

は、主人公の鈴木由香や金丸らである。

作品の、農民たちによる演劇上演のプロットは、
また形で織わせてくるように思わわれる。共演団の呼び掛けで、「解放」前から、現在の諸負制反撃に到るまでの、貧農の歴史を描いた「翻訳記」で復員軍人の方々が台本を書き、村の子どもたちが稽古をしながれ、台本が書き換えられていく過程が面白かった。春宮は文革中の文学理
論を思わせるような公式的意見を述べる。例えば、主人公の金太郎が地主の家を焚き取り、女優が失京の元に、娘の危篤を妻が知らせるので、決然として決断するようになるのはやよいさと指摘したりするなどである。一方、保地と同花は粋な劇的効果を盛り上げるように、娘の危篤の面をや
に息を引き取っていた、という「掛歓失女」の場を、同花は、これではつまらないと考え、まず娘の危篤の場面をや

について、彼は頭がくらくらして、足元も定まらない。提灯を提げて、一歩踏み出す毎に提灯が揺れる。ふらふらしながら
を掛けようとした時、思わず体が傾いて、まっ逆さまに転げ落ち、卒倒してしまう。これでこそ、彩があるって
いうもの。
すると、それに続いて、保地は、
心配事があった。梯子から落ちるくらいはするが、それで死んでもしまうとは、ないだろう。俺だったら、その
提案に、春旺は「そう考えると、影ができるだけでなく、
大の否定的人物、黄光は数千制導入の工作に失敗し、自己批判するが、
同時に心の中でつぶやく。
しかし、彼の心の深いところは、もう一つの考えがしつこく、こいく、あげていた。生産請負をしないで、どうして農民の積極性を動員することができるだろうか。

というのだが、
登場人物をしての黄光も政治情勢の変化を見て、機敏な出世主義者であり、
請負制の導入でも、第一には自らの昇進
人栄業も含む」という言葉が黄光のよう、どこにある、
金大力の死を地主階級のせいにす
るのは良い。などとたまたしても政治主義的発言をするのだ。

『万年青』は文革のイデオロギーが浸透した作品であるが、ここから逸脱する危うさもあるからだ。ぜひ。
お茶の水女子大学中国文学会報 第十三号

高島俊男氏は一九七七年に、文革末期の小説『春畑』を例に取り上げて、否定的人物の『反革命的』『言辞』として「人民の声」が文革中の文学作品に現れていたことについて、
わたしが必ずしもこの小説の作者が、意図的に、否定的人物の口を借りて中国人民の声を語らされたのだ、と言うのではありません。しかし、文学というものは、作者の意図とはかかわりなく、いなおうなに時代と社会の真実を反映してしまうことがあるのです。それを読むと、これはもう読む手の加わる問題です。

作品中の直接最大の敵、江玉林（通称老陰天）の場合は異例深い例を提供しているように思われる。

老陰天は地主階級の復権や国民党の反攻が幻想に過ぎないことを冷静に認識する頭脳の持ち主で、自分の野望を実現するためには共産党内に潜む勢力を期待をするしかないと考えている。

新聞を読んで、共産党にも右派がいることを知った。いいや、それは政治家たちで、一部書記が潜入した悪人で覚察されたという。最初、彼は共産党とは何と冷酷無比なものですかと思ったが、
しかし色々な話を聞いたり聞いたりする内に、ようやく見えてきた。共産党も一枚岩ではない。

反対する者たち、国民党のために元々働いていた者もいるのだ。考えてみれば、自分だってもっと少し、共産党に入ることができるかもしれない。
共産党が手ごわくて、とくにそれを防ぐ手だてを打っていることは彼も知っていた。そうでなければ三年の間に二年も整党をやるはずがない。だが逆に、いくら整風を行っても、どんなに網を張ろうが逃れる魚はいる。それでもやられてしまったとは思えない。仮にそうだとしても、手だてはある。ライオンでもしっかり言うじゃないか。

この独白をどう読むかはかなり微妙である。現在の読者は、共産党の右派狩りの誤りが端なくも表れていると感じている。文章中、ędち上げの根拠によって国民党の手先と断罪された例を想起したりするかもしれない。だが、この部分はもっと重層的である。

引用最後の「打進去、拉出来」は、敵対階級の革命破壊の策略を「打進去、拉出来」と言ったもので、その正当性を保証する機能を果たしていると言えよう。これには作者の統括範囲に収まるだろう。しかし、作者の革命理論を表から表現されないが、人民の側から見れば、「来」「出」が逆になるわけである。たとえも「来」「出」が逆になるわけである。たわいないレトリックではあるが、共産党の雑埃を打進去、拉出来」が起源であることを示していてもいる。言うまでもないが、事実として反革命活動があっただかなかったか問題ではない、言説として、まず反「万年青」があくまでも見なければならない。
絶対的根拠としては「毛沢東」などの問題については、稿を改めて論ずるつもりである。

作家論考.Im即して、感想していたことを補足しておきたい。

文革期において、ほとんど既成作家が自ら、あるいは外部的暴力によって筆を折った。この空白の時期に新しい作家が現れた。彼らの多くは文革後文壇から姿を消す。岩佐昌穣氏は彼らの思いを代弁するように、

復活した作家たちについて盛んに語られながら、こうして消えていった人々について語ることは不可能である。

さて、彼らもまた彼らの真実を描いたのであり、彼らによって書きとめられたものは、やはりさまざまなない七〇年代のある実相にほかならないからである。

たとえ歴史の真実が復活した人々の側に属す

と述べている。講評のある意味ではその一人であると言える。彼らは創作者としての出発点において、他の世代とは違って、文革イデオロギーの宣伝者の役割を担われ、自ら引き受けた。だが恐らく、彼らには最初に、書く、作るという行為への憧れと欲求があったのではないか。

これらの政治的内容の故に葬り去られるかもしれない、光明と黒暗に奇妙な音楽家が登場する。丁丁というこ

の音楽家は、老幹部を復活すれば老幹部を風吹き曲を作曲し、造反派を描きと言われれば造反派の曲を作曲する。

それぞれがどうもひどい曲らしい。作品は第一部で中断しており、その段階では、「老幹部を書いたから、走錯派の名誉回復をもくろむ」だと言われ、造反派を書けば何立言、造反派の人物を讃美するもののだと言われる。もうたく

さんだ、うんざりだ。もうこれっきり書かないとふてくされ、もっと生活を知るために、主人公、田大新の視察に
同行するよう誘われても、「行っと書いていたのをすぐに田大信の先輩をかつかときた言われる」と拒むのだが、この正面

人物と反面人物の間を渡り歩く人物には、作家としての謹容の自己意識が投影しているように思えてならない。心仪的人

現実の謹容が発表し続ける作品はもちろんな箱開文人のものではない。五〇年代以来の知識人政策を皮肉った「散談

から、現在の社会を鋭く風刺した「人到老年」まで、非常に批評性の強い世間の作品に生み出している。その

の押しつけられた真実を対比する強さと、作家としての意識とは恐らく深く結びついているのであろう。注

1 多々「九三〇」一九七八年北京地下詩歌「今日」三〇一九九〇年

2 須藤「九三〇」文学と「九九〇」民主運動「九三〇年」

3 楊健著「九三〇」の意義「九三〇」一九九〇年

4 楊健著「九三〇」

5 足南「九三〇」文学と「九九〇」民主運動「九三〇年」

6 須藤「九三〇」詩集「九三〇年」

7 楊健著「九三〇」文学の面「九三〇年」

8 岩佐昌隆「九三〇」文学の面「九三〇年」

9 人民文学出版社「九三〇年」

10 人民文学出版社「九三〇年」

11 謹容「九三〇年」

12 「九三〇年」

13 「九三〇年」

14 「九三〇年」

15 「九三〇年」

16 「九三〇年」

17 「九三〇年」

18 「九三〇年」

19 「九三〇年」

20 「九三〇年」

21 「九三〇年」

22 「九三〇年」

23 「九三〇年」

24 「九三〇年」

25 「九三〇年」

26 「九三〇年」

27 「九三〇年」

28 「九三〇年」

29 「九三〇年」

30 「九三〇年」

31 「九三〇年」

32 「九三〇年」

33 「九三〇年」

34 「九三〇年」

35 「九三〇年」

36 「九三〇年」

37 「九三〇年」

38 「九三〇年」

39 「九三〇年」

40 「九三〇年」

41 「九三〇年」

42 「九三〇年」

43 「九三〇年」

44 「九三〇年」

45 「九三〇年」

46 「九三〇年」

47 「九三〇年」

48 「九三〇年」

49 「九三〇年」

50 「九三〇年」

51 「九三〇年」

52 「九三〇年」
お茶の水女子大学中国文学会報 第十三号

中華和津次 「中国における集団農業の展開とその限界」 毛沢東時代の中国 日本国際問題研究所 一九九八年

その一

中華和津次 『人到中年』を読む 『新華社報』 一九八五年

その二

中華和津次 『中国における集団農業の展開とその限界』 毛沢東時代の中国 日本国際問題研究所 一九九八年